

JICA 緒方研究所・第三者評価委員会（第10回） 概要

1. 日時：2020年7月28日（火）14:30～16:30
2. 場所：JICA 緒方研究所 4階400号会議室、及びオンライン接続
3. 出席者

【委員】 静岡文化芸術大学文化政策学部	下澤 嶽 教授
東京大学公共政策大学院	城山 英明 教授
関西学院大学	西野 桂子 教授
法政大学法学部	弓削 昭子 教授

【JICA 緒方研究所関係者】

研究所長 大野泉、副所長 武藤めぐみ、次長 伏見勝利、各領域長 他

4. 議事概要

開会挨拶の後、第三者評価委員の紹介とあわせて下澤委員に昨年度に引続き委員長を務めていただくことを確認した。その後、JICA 緒方研究所から、「2019年度 JICA 緒方研究所活動報告」に基づく説明・報告がなされた後、各委員からの質問・コメントと JICA 緒方研究所からの補足説明があり、最後に委員長が総括を行った。概要は以下のとおり。

（1）各評価委員からの質問・コメント及び JICA 緒方研究所からの説明概要

●研究成果の対外発信について

- ・ 「世界の JICA」としての影響力を示す観点から、国際潮流に能動関与し、G20/T20、TICAD7 等での積極的な知的発信、政策提言、議論を実施できたことを評価する。
- ・ 2019 年度において、国際開発学会・人間の安全保障学会（共催）で JICA 研究所から多くの発表を行う等、アカデミックな研究成果の発信に精力的に取り組んだことを高く評価する。また、（今年度に入り JICA 全般として）コロナ禍のもとでウェビナー等の活用を通じた発信が増えたことは、地方在住の研究者や学生にとって良い方向性。Web を通じた研究成果の継続的発信を含め、東京以外でも JICA 緒方研究所の研究に触れる機会が持てるよう、引き続き努めてもらいたい。

●共同研究、連携パートナーに関して

- ・ 長年の共同研究パートナーである IPD やブルキングスに加え、UNDP との連携、またグローバル・ディベロップメント・ネットワーク（GDN）等の途上国で活動するシンクタンクとの共同研究は興味深い。多様なパートナーとの連携において、先進国と途上国双方の研究機関との協働は重要と言える。連携機関の選定において、先進国

と途上国とのバランスをとり、研究成果に関して先進国・途上国の両方から信頼を得る必要があるが、こういった点をどの程度意識しているか。

- ・ 「開かれた研究所」、「日本の開発・国際協力研究のハブ」「世界をリードする研究拠点」を目指す目標に関し、海外の研究者/研究所などからのアプローチや共同研究への関心は示されているのか。また、連携パートナー選定に関しての基準があれば教えていただきたい。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ パートナー選定に明確なクライテリアを設けているわけではないが、同じ問題への研究関心を持っていること、インパクトを持った成果発信ができるか、共に切磋琢磨できるか、問題意識を共有できるか等に重点をおいている。GDN との連携は、途上国の研究者・シンクタンクと接点がある点を重視した。今後は、先進国のみならず新興ドナー国との知識の相互共有を意識してアセアンの研究機関との連携も強化していきたいと、2019 年度に開発協力パートナーシップをテーマに共同研究を始めたところ。また、インパクトの大きさから言えば UNDP や、これまでも交流がある ADB や WB 等との連携も検討していく。

●研究領域・研究テーマの設定等について

- ・ 新規研究プロジェクトは、(昨年度に指摘あった) ビックピクチャーの重要性をふまえ、かつタイムリーなテーマを選定していると評価する。
- ・ 現在、検討段階として挙げられている案件は、COVID-19 との関係も深く、立ち上げに期待する。
- ・ 地政学的（ジオポリティカル）観点にフォーカスした研究やインプリケーションの議論があってもよいのではないかと考える。米中対立という国際環境を踏まえた調査研究、補完的な視点の提供や日本の在り方に関する思考、等々、アセスメントがあってもよいのではないかと考える。環境分野のメコン流域の事例は（中国の流域管理に関する）現状アセスメント、東南アジアシンクタンクネットワークの事例はジオポリティカルな意味で評価ができると思料。
- ・ 保健の UHC 研究など、比較優位は何かの検討も含め、研究の具体化に期待する。既に具体的に決まっていることがあれば知らせてもらいたい。
- ・ 緒方研究所として平和構築と人道支援への注力につき、更なる広がりを期待したい。

●人員体制、人材育成について

- ・ 研究員とリサーチ・オフィサー (RO) の業務の違い、RO の業務内容などはどのようなものかを示してもらいたい。研究員と RO との英語名称の違いは何か？
- ・ JICA 緒方研究所からの人材の輩出（大学等）や諸々の機会提供など、人材の拠出元

という観点も評価の一つとして示すことも一案ではないか。

- ・ 人材育成に関し、研究所の全体図に書かれている「内部の人材育成を通じ Intellectual JICA の実現に貢献」とあるが、こういった方針とフォーカスなのか？

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ JICA 本体と研究のつながりの重要性、JICA が社会へ貢献することの重要性は認識しており、ご指摘いただいた人材育成の貢献・成果も一定程度あると言える。
- ・ RO は、研究の内容を理解しつつ実務レベルで各種調整・フォローをする役割を担って活躍してもらっている。
- ・ 英語名称は、研究員は Research Fellow、リサーチオフィサーは Research Officer と区別している。内部的にはロジスティックス対応を含む要員を RO と整理している。
- ・ 現場で実施している事業に研究所が関わることによる、事業部だけで実施できない分析・検討や知的発信等への貢献がある。例えばプロジェクト・ヒストリーを通じて、JICA 事業実績を一般の人へ分かりやすく明示することを通じたノウハウ共有などの貢献がある。
- ・ 人材育成（内部人材）への貢献は一義的には人事部が行うものだが、これに対する研究所の役割を明記することで、「Intellectual JICA」への貢献をめざしている。

●事業へのフィードバックについて

- ・ 研究の事業へのフィードバック（FB）は前年より強化されたことがわかるが、図 1 類型イメージの各カテゴリーに何件あてはまるのかが示せると、より分かりやすいのではないか。
- ・ JICA 研究所の大きなメリットは現場を持っていることであり、現場への FB がより重要視されるものと理解。全体図を整理して FB をパターン化したのは重要。
- ・ JICA 事業への FB の類型イメージ図（報告書 P19 の図 1）はとてもわかりやすい。うち C 類型（事業関係者による知見の活用）の事例をより増やすことに期待する。今回のカンボジア（中央銀行の研究人材育成への貢献）、メコン流域（中国の環境協力の現状調査）などは好事例。さらに踏み込んで、一つの事業への継続的なかわりができないか、この種のバリエーションをさらに増やすことに期待する。
- ・ 現場の職員等が参加しているプロジェクト数が 29 件中 22 件とは、FB が機能していることを示す上でよい数字。
- ・ 人間の安全保障の理念に関する説明（JICA 基本方針への反映）は、FB としての具体性がわかりづらい。人間の安全保障のうちの何を重視するのかをより明確にするとさらによい。
- ・ カンボジアの金融包摂の研究は、中央銀行の人材育成支援としても良い事例と言え

- る。どういうメリットがあったのかをより整理してもらえると良い。同様に、Gender-based Violence (GBV)は新しい視点だと思われ、今後の動き次第でさらなる成果を期待する。今年度の評価には書けなかった他の良い事例があれば示してもらいたい。
- ・ JICA 緒方研究所の重要な方向性の一つとして、JICA 本体との連携の厚み、パイプの太さをより一層進化させることに期待する。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ カンボジアの事例は、これまでの長期間の研究を通じて先方実施機関と構築した関係性を通じて、現場への FB が実現できたもの。環境分野の研究の中には、事業部での取組から発した問題意識が研究へつながったものもある。
- ・ 事業への FB に関する件数表示の工夫は今後の検討事項とさせていただく。今後一層の開拓の余地があると考えているのは C 類型で、ビックピクチャー、ジオポリティカルな観点も含めて、事業部が大きな視点で相手国と政策対話を行う際の素材形成に貢献できるとよいと考える。

《JICA 緒方研究所からの説明を受けた委員コメント》

- ・ P. 19 の FB 類型イメージのうち C 類型を増やすことについて、ファクトのみならずプロセスを整理することも一つの成果になると理解した。例えば、カンボジアの事例のように長期間の研究コミットメントと実務的オペレーショナルなコミットメントが結びついたプロセス、また、環境分野の検討プロセス等、どこかに研究コンポーネントを絡ませたことが好事例につながった、等と整理できるとよい。
- ・ (ポストコロナの新研究で) サプライチェーンに関する研究を進める場合、より広義のセキュリティ、レジリエンスなども絡んでくるように思われる。マルチセクターな取組が可能になるものの、どこかに焦点を充てることも重要と思料。

●定量評価について

- ・ 年度当初のカテゴリーごとの目標設定状況と、それに対する結果を示してもらいたい。
- ・ 研究所の活動の評価は難しいものと理解しているが、数値的にどのように整理しているのかをより明確に説明ありたい (p. 2 の表 1: 業務実績の評価指標及び 2019 年度の達成状況)。
- ・ P. 18 のグラフに関し、WP のダウンロード (DL) 数の総数が減少している理由がわかりにくいいため、より詳細な説明を受けたい。
- ・ 継続的にほぼ同数の WP を発刊しているのに対し、DL 数が減少している点について明確に説明ありたい。また 2020 年度に際して変更があったのか確認したい。
- ・ ポリシー・ノート発刊数が 2018 年度の 5 件から昨年度は 1 件に減少している理由

として、昨年度は T20 に向けた政策提言の発信やフォローアップなどのアウトリーチ活動により重点を置いたこともあるように推察するが、補足説明をするなど、表現方法の工夫があると良かった。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ 全体として WP の DL 数は大幅減だったが、内訳をみると、Web サイトからの直接 DL 数は（2018 年度）3.7 万→（2019 年度）3.6 万とほぼ同水準だが、グーグル等の検索エンジンによるレポジトリからの DL 数が（2018 年度）7 万→（2019 年度）1.1 万に大幅減少している。レポジトリの大幅減少は検索エンジンの検索ロボットの技術的な仕様の変更によるものと考えている。Web サイトの DL 数の微減については、2019 年度は WP の発刊が年度末に集中してしまったことが要因の一つと考えており、WP の発刊時期を集中させないことも今後の検討事項と認識している。
- ・ DL 数は 2015 年度→2016 年度の激減時にも同様の議論があった。検索エンジン・レポジトリについては技術面も含めた再検討の必要性を認識している。P.2 の表 1 の指標に関し、前中期計画ではインプット思考に基づき、書籍発刊や WP 発行の数などを評価指標としていたが、今期中期計画ではアウトカムレベルへ移行した。こうした経緯もあり、DL 数を評価指標としたが、技術的な部分には理解が及んでいなかった。次期中期計画時にはこれら状況を踏まえてより適切な指標設定が重要と考える。

《JICA 緒方研究所からの説明を受けた委員コメント》

- ・ 昨年の委員会でも、DL 数の実態把握が難しい点について議論があった。安定的な計測ができる方策・体制について、外部の専門家の意見も踏まえて検討してはどうか。
- ・ JICA の HP から保健分野などを閲覧すると JICA-RI の関連研究ページのリンクにアクセスできるようになっているが、WP の意味が分からない学生もおり、クリックしない。WP が何かを明示することで学生のアクセスが増える可能性もあるのではないか。

●名称変更と新ビジョン、ブランディングについて

- ・ 名称変更を機に、研究所の新ビジョンと 3 つの基本方針を明示したことを高く評価する。事業を持つ JICA の強みを活かした研究推進が明示されている。この新方向は 2020 年 4 月を機にしているが、継続案件を含めた 2020 年度の活動がどのような方向性となるのか、新規案件はどの程度あるのか、確認したい。
- ・ 「緒方貞子平和開発研究所」として、研究の基本方針をより明確にブランディングされたものと評価する。昨年の委員会で指摘されたブランディングの議論に対応さ

れたと理解した。

- ・比較優位を明確化した名称変更については、これまでの議論に沿ったものと評価するが、名称変更を受けて、これまで（年度当初の名称変更から委員会の時期まで）どのように変わったのかを聞かせてもらいたい。これまで領域名であった「平和開発」が研究所全体の名称になったこと、及び、他の4領域との関係など、整理された詳細を説明いただきたい。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・「人間の安全保障」は JICA のコア・ミッションであるが、紛争・平和構築のみならず、気候変動や移民、デジタル格差など広義にとらえる方向を JICA 全体として昨年度打ち出した（Ver. 2.0）。名称変更を通じ、研究所の他部署に対するメッセージ性が強まった側面もあり、事業部と連携強化、マルチセクターの視点をいれた研究などを推進している。一例として、現在アフリカ部と共同で、人間の安全保障の視点を反映した研究を（2020 年度の取組であるが）検討中。
- ・「人間の安全保障 2.0」は今日的なリスク・課題も意識したもの。地域部や課題部の視点を踏まえると、研究所は SDGs 全体に目を向け、「質の高い成長」を通じて発展の基礎を支える観点など、地域・セクターに合った良い組合せ（mix）について、JICA 各事業部へ向けた提言ができると考えている。よい事例の形成・主流化は我々のチャレンジであると認識している。
- ・緒方研究所がめざす方向は、「世界をリードする開発・国際協力研究の拠点」。2020 年度に入り、新たに With コロナ・Post コロナの世界を見据えた研究に着手している。JICA 理事長の発案で JICA 他部署とも連携しながら研究所が中心的な役割を担っている。目下の世界情勢、米中関係などを踏まえたコロナ後の国際秩序を洞察しつつ、保健、アジアのサプライチェーン等の研究を、「人間の安全保障 2.0」の視点や国際協力への示唆を念頭において検討している。

《JICA 緒方研究所からの説明を受けた委員コメント》

- ・人間の安全保障は、様々な危機が重なる時に包括的なアプローチが必要となる、というのが元々の概念と理解。JICA が「人間の安全保障 2.0」をはっきりと打ち出したことに伴い、(SDGs に対応した)「5P」の研究領域と人間の安全保障との関係性をより明確にするのが JICA 緒方研究所の今後の取組と史料。

(2) JICA 緒方研究所からの補足説明

●「平和構築と人道支援」領域について

研究所の名称変更に伴い、領域名も変更した。引き続き、平和構築や広義の人道危機対応を含む、人間の安全が脅かされる状況を、幅広く扱う予定。当領域ではコロ

ナ危機以前より、治安の関係で、遠隔で調査を実施した事例もあるので、こうした知見も共有していく。

●環境分野の取組

(本部との連携研究、事業との一体化につながる研究について補足説明)

地球環境領域では、JICA 現地事務所、関係日本人専門家及び C/P 機関との連携を重視して研究業務を行っている。さらに、日本環境省との意見交換や、例えばベトナムでは先方政府が進めている環境保護法改正に関する意見交換等にも参画し、現場での課題を把握し、研究成果を踏まえた FB も随時実施している。

●保健分野における取り組み

UHC 研究の立ち上げ段階で COVID-19 禍に直面し、こちらを優先して新規研究を検討している。5 月末に、日本や途上国における COVID-19 への取組の分析や、JICA のコロナ禍の今後の取り組みについてのコミットメントを発信した。今後のコロナ関連の新研究を検討中で、多くの 이슈があり絞り込んでいるところだが UHC と関連する内容が含まれると考えている。

●今後の取組について

事業に直結する研究成果を出すことが JICA 緒方研究所の存在意義と認識する中で、ポストコロナにおける JICA や国際協力のあり方に関するビックピクチャーを描く必要性を痛感している。理事長の人脈を通じて外部有識者を招き対談を行っている。

また、コロナ禍により、2020 年初に予定していたナレッジフォーラム関西開催の断念など影響をうけたが、平和開発領域が蓄積した紛争地域など現地入り困難な環境下の研究手法を所内で共有する等、コロナ下での研究方法について今後の対応を検討中。

5. 委員長総括

- ・ 全体的に JICA 研究所の質感の高まりと方向性を評価する。大野所長の着任以降のスピードアップにより期待は高まっている。
 - ① 世界の援助潮流への積極関与は継続してもらいたい。併せて、研究パートナーの選定におけるクライテリア、優先順位を明示してほしい。見える化を維持してもらいたい。
 - ② 「緒方貞子平和開発研究所」へ名称変更があった飛躍の年として期待する。「人間の安全保障 2.0」を盛り込んだ新テーマの再構築、5P との関係性の整理をより明確にされることを期待する。

- ③ JICA 本体との連携強化、プロセスの見える化、フィードバック C 類型の事例増とビックピクチャーでの整理をするとよい。
- ④ With コロナ・Post コロナ研究については、JICA らしい取組の成果が出ることを期待する。
- ⑤ 内部人材の育成に関するガイドラインの明確化、Intellectual JICA への貢献に関する取組に期待する。研究所が輩出した人材等、人の流れについても注目したい。
- ⑥ WP の DL 数などは目に留まる。増減に対する安定的な管理体制を整備してもらいたい。評価指標については単純な DL 数の増減のみならず、他視点を取り入れた指標の整理にも期待したい。

6. 閉会挨拶

- ・ 多くの貴重な助言に感謝。
- ・ 冒頭に申し上げたとおり、2019 年度は①国際潮流に能動関与し、内外の知的ネットワーク拡大で成果をあげ、②研究所のさらなる飛躍に向け、次のステージの基盤づくりをした 1 年だったと思っている。
- ・ 現在、コロナ禍というチャレンジに直面しているが、在宅勤務等をしながら、オンライン・セミナーや Intellectual JICA への貢献など、研究所のあり方を検討する機会となったと感じている。特にここ数カ月は、ICT 環境整備等をしつつ、緒方研究所として JICA 内そして対外的に何ができるのかの検討を進めてきた。
- ・ 今回の活動報告とりまとめも試行錯誤の状況で行わざるを得なかったが、ご示唆いただいた貴重なご意見や励ましを糧として、研究・発信活動や内容のイノベーションに果敢に取り組んでいきたい。

以上